

iPS心筋治療へ

慶大系、21年にも 量産体制を整備

慶應義塾大学発の心筋再生医療スタートアップのハートシード（東京・港）は、2021年にも国内でiPS細胞を使つた心臓の再生医療治療法の臨床試験（治験）を始める。このほどアステラス製薬など3社から合計8億円を調達。株主の協力を得て治療法の実用化に向けた体制を整える。ハートシードが実施した第三者割当増資を、アステラスと独立系ベンチマークキャピタルのエンジニアリング（東京・千代田）、渋谷工業の3社が引き受けた。

ハートシードは慶大の福田恵一教授らの研究成果をもとに、難治性の拡張型心筋症でiPS細胞から作った心筋細胞を心臓に移植する治療法の実用化をめざす。17年には病治療をめぐっては大阪大学の澤芳樹教授が18年なiPS細胞や心筋細胞を大量に作れる方法も確立している。アステラスはiPS細胞の研究を進めながら、ES細胞による眼科領域の治療薬も開発している。一方、渋谷工業は細胞培養装置の製造設備の経験が豊富だ。ハートシードは新たに株主になつた事業会社2社のノウハウを吸収する。

再生医療を使った心臓に移植する治療法の実用化をめざす。17年には大阪大学の澤芳樹教授が18年度中に臨床研究を始めるとしており、今後実用化段階での競争も激しくなりそうだ。